とかす力（八木重吉の詩を愛好する会会報）

事務局（連絡先）〒277-0014　千葉県柏市東 3-8-34　柏第一宣教バプテスト教会
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊天利武人（教会牧師）電話 04-7164-9159
（会報編集、ホームページの連絡先）〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継
＊＊＊＊＊＊　Ｅメール　kmat27aiko@gmail.com　　携帯電話 09061674553

☆　第　１６　号
☆2018 年（平成 30 年）
９月５日　発　行

★2018 年の茶の花忌案内

今年も１０月２６日（金）に八木重吉生家で茶の花忌が開催されます。藤雄様亡き後、長女に当たる佐藤ひろ子様が、早くから準備を始め、ほぼ当日の内容が決まり、昨年参加された方々には案内のハガキを送るところだということです。

墓前礼拝は今年も桜美林教会の小林茂牧師の司式で行われる予定です。その後の八木重吉を偲ぶ会は、開会の辞として昨年同様、加藤正彦さんが吉野秀雄、草野心平、加藤武雄等八木重吉を巡る人々について思い出をよみがえらせながら語ってくださるとのことで、直接面識のなかった八木重吉ファンにとってはとても楽しみです。また昨年も詩人として深みのある話をして下さった八木幹夫さんが、講演してくださいます。それから、八木重吉の詩の朗読を今年は地域の人々がしてくださることになっています。以前から地元で茶の花忌に協力して下さっている青木幸雄さんに、相原地域の地元の人々の参加があるといいですねと話したことがあるのですが、今年は実現しそうです。私（小林）も「八木重吉の詩を愛好する会」として愛好の輪を広げたい思いや、個々の愛好者たちの中に埋もれている資料を集めて後世に残すという使命を語る時間をもらっています。司会進行はいつもの中野屋の杉浦さんが務めて下さいます。是非楽しみにして、茶の花忌にご参加ください。

昨年加藤正彦さんが配布してくださった写真付き記事（神奈川新聞１９９８年６月１日）を紹介しておきます。

この写真は、昭和２８年「川尻村公民館」で行われた「八木重吉２５回忌」の催しの際の墓参時の写真です。加藤正彦様のお父様である加藤哲雄さんとその夫人梅子さんが「はぐさ会」を主宰し、地元の川尻村公民館へ吉野秀雄・とみ子夫妻を招き「八木重吉を偲ぶ会」を実施し、翌日墓参したようです。

投稿者は、後列左から３番目の小坂（旧姓安西）美代子さんで記事の最後の方で

その日の吉野先生の詠まれた歌は、今でもはっきり覚えています。

重吉の妻なりし今のわが妻よ
ためらはずその墓に手を置け
吉野秀雄

と記しています。

「はぐさ会」は、川尻小学校創立１００年記念事業として八木重吉の詩「飯」の建立を働きかけたようで、昭和５２年に出来た詩碑「飯」の建立に尽力したのです。

★柏八木重吉文学散歩―重吉の詩の風景を柏に訪ねるー　の案内

久しぶりに独自の活動をします。今回は八木重吉が詩にうたった自然にスポットをあてて見学します。

時：９月２９日（土）13:30～

日程　13:30　柏駅西口集合（駅構内から出たデッキ付近に）

13:50　詩碑「原っぱ」、東葛飾高校、重吉旧居跡付近見学

14:50　柏市内に残る当時の風景を求めていくつか見学

15:30　第一宣教バプテスト教会（天利牧師）にて懇談会

チラシを同封しておきます。柏に来たことの無い方は是非おいでください。

★貴重な記録資料紹介コーナー（第１回）

今回から一般にあまり見かけなくなった、しかし残しておきたい資料をできるだけ紹介していくコーナーを設けます。今回は、八木重吉の弟である野坂純一郎氏の文章を紹介します。ご子息にあたる野坂孝さんからいただいた資料です。どこかでお目にかかっている愛好者の方がいると思いますが、一般には見逃してしまっているかと思いますので、あらためて紹介します。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

加藤武雄と八木重吉

野坂純一郎

これは昨年「川尻小学校創立百年記念誌」に原稿として書いたものに、このたび、「八木重吉没後五十年祭」を迎えるに当たり少し加筆したものです。　一九七六・一〇・二六

一、加藤家と八木家

私の生家は町田市相原町大戸の「八木嶋」です。五人兄弟姉妹は時代により年限の相違はあったが小学校の高等科は、皆、川尻小学校で過ごした。加藤武雄と私達はまたいとこの間柄であった。然し次兄、八木重吉にとっては川尻校での恩師でもあった。私達の祖父政右エ門は川尻村町屋の「榎木戸」からの入り婿であり、私達の母つたは同じく町屋の小林与兵衛の娘であった。つたの母はやはり川尻村の都井沢の加藤忠太郎―武雄の父―の妹であった。

私は男で末子であったので祖父政右エ門とは長く起居を共にした。祖父の枕元に中型の二枚折りの屏風があった。それに山水の水墨画がかかれてあり、左下に「武雄八歳画之」と書いてあった。私はまだ会ったこともない武ちゃん（私の家では皆そう呼んでいた）がどんなに秀才であるのだろうかと、その時から思うようになった。（近年、令弟哲雄氏からそれは祖父忠太郎が趣味として文芸を愛好していたのでその指導によるものであったとのことを承った）。重吉が川尻小学校時代の加藤武雄先生について私に話したことで次の二つを思い出す。武ちゃんは話をする時いつもちょっと口許を押えながら話す。或る日「ポーランド滅亡の歌」を教はった。（　一日二日（ひとひふたひ）は晴れたれど三日四日五日（みかよかいつか）は雨に風　）

二、川尻校とその樹栽地

川尻校の樹栽地は境川の上流全く尽きはてるあたり山腹一帯にあり年一回の補植、下草刈りに最高二学年男子は先生方と共に出動した。往復途上引率監督の先生方が私の生家の縁側で小憩されることがあった。私は川尻校に入学しないうちから何人かの先生方のお顔を拝見していたのである。武ちゃんは、しかし、住居が村の西端、都井沢であるから、大戸を通らず裏山伝い龍篭（たつご）山方面から樹栽地へ行かれることが多かったことでしょう。当時―少なくも私の在学時代は下草刈りしたものは生徒の力によって、できるだけ沢山運搬して学校裏の農場に運び堆肥の原料とされた。町屋、小松、穴川そして大戸など、農家からの生徒は自家用荷車を提供、皆で之を利用、満載してその日直ちに運搬するのが恒例であった。（この樹栽地経営の目的は勿論将来学校改築に当たってその資源とするためであった。）

三、重吉の進学、就職

重吉は川尻校から鎌倉師範学校に進み更に東京高等師範学校（英語科）に入学した。高師受験準備のため其の

前年の夏休み神田で英語講習を受けるため上京、二週間位、牛込区矢来町の新潮社々員、武雄さんの新居に置いていただいた。その時、あとから母から聞いた話ですが、母が重吉に母の手織りの反物を持たせてやった。この反物は、しかし、後日、武雄さんの或る小説によれば、質屋に入れられることが書いてあるとの事です。やがて私も池袋で寄宿舎生活をするようになり重吉と一緒に時々お邪魔した。「純一郎くん、いくつになった？」「重吉くん、いくつになった？」お訪ねするたびに同じことをきかれるので二人は顔を見合わせるのであった。私がその後川尻校の様子や私の同級生―T 君や K 君など一の話をすると、興味深げに聞いておられた。長女がお生まれになって間もない頃のお正月に参上、おいしいお汁粉を若奥様から沢山ご馳走になったことは今も覚えている。

重吉は大正十年三月卒業、兵庫県御影師範学校に赴任、私も同四月、広島高師に入学、それぞれ四ヶ年を過し、大正十四年四月、二人は奇しくも同じ千葉県下の二つの創立間もない旧制の県立中学校に赴任した。重吉は柏町にある東葛飾中学校、私は八日市場町にある匝瑳中学校であった。

四、詩集「秋の瞳」

重吉は御影時代に家庭を持ち、この頃すでに詩を沢山つくっていた。武雄さんの序文をいただき自選詩集「秋の瞳」を出版、文壇、特に先輩詩人に贈呈、批評を乞うたのである。

たしか此の年の暮れ近い頃、成城の新居に武ちゃんを二人で訪ねた。丁度、読売新聞に連載中の小説「審判」の原稿執筆中であった。この日、武ちゃんは「同窓会」を作ろうではないかと申されていた。（武雄、小林権一郎、八木政三、重吉、純一郎、加藤哲雄などを考えていられたのでしょう。）

重吉は「秋の瞳」により詩壇にもようやく認められはじめ、これからという時発病、昭和二年十月二十六日、茅ケ崎の療養所で亡くなった。（二十九歳九ヶ月）

五、暗い時代

此の頃より次第に世は不景気。就職難の時代にはいる。上海事変、満州事変、日支事変そして昭和十六年遂に太平洋戦争に突入の時に至る。私は昭和十二年から東京世田谷区に在住しながら、戦前、戦中、そして戦後を通じ、成城の武雄さんのお宅に参上することもなく二十余年を過してしまった。昭和三十一年九月、武雄さんの告別式の日、私はそのご霊前に深く頭を下げてお詫びするのみであった。

六、「重吉没後三十年記念講演会と独唱の会」「詩碑」建設

戦後、間もない頃から、重吉の詩は、小林秀雄、草野心平、高村光太郎などの言葉もあり、広く読まれるようになり、やがて中学校や高校の教科書などにも採用されるようになった。昭和三十一年十二月、私は蔭の人となって、私の勤務校があった中野区の文化会館を借り「八木重吉没後三十年記念講演会と独唱の会」を開催。（講師は草野心平、佐古純一郎、伊藤信吉、大江満雄氏、外。独唱は畑中良輔、更予氏による重吉の詩に作曲したもの数曲。）

然し此の日が重吉の最大の恩人の一人、武雄さんの百ヶ日に当ることに考え及ばず、却って花子夫人から次のようなご丁寧なお手紙を頂いた次第です。「重吉さんがおなくなりになりまして、もう三十年になりますか。本とうに月日の経つのが早いのにおどろきます。九日に記念講演会の御催し、加藤が元気でおりましたらと残念で御座います。御伺い申したいのでありますが不自由な身体でおります上、当日は丁度加藤の百ヶ日になりますので失礼させて頂きます・・・。」

翌、昭和三十二年十月二十六日、重吉の命日の日、記念詩碑除幕式が生家のほとりで行はれた。ご列席の草野心平氏その他からお言葉を頂いた。詩碑建設資金は先年の講演会当日以後、近くは川尻村方面その他全国各地の多くの方々からの浄財によるものでした。なお、この詩碑建設の日を迎えるにあたり、私は、此の日を記念し、また、母校を、そして故郷を思う心の特に深かった、重吉の意を体し、母校川尻小学校と相原町堺中学校に、彼の詩数編がのっている創元社版「現代日本詩人全集（全冊）」を、それぞれご寄贈申し上げたのであります。

七、「母つたの話」から、二つ

私たちの故郷は昔は養蚕の盛んな所であった。母は養蚕の仕事などしながら相手をしている幼い私によく自分が川尻小学校時代、特別に夜学として、時の校長先生から英語を学び覚えたと言い、ビーオーワイ、ボーイ、シ

エーティー　キャットなど繰り返していた。(今日、川尻校創立百年と申しますが創立後余りたたない明治の中期頃から断続的にせよ英語学習が行われていたことがわかるのであります。)

重吉は私より二歳半位年上、弟から見ても温良であり学業は特に優秀であった。「重ちゃんは申し分のない子だろう」と、或る時母に言ったところ「あの子は、おとなしい子だが、根はとても癇性が強いところがある。小さい時（三、四歳頃？）大へん大切なお客さんがきたとき重吉のおかげでおかあさんは泣かされてしまったことがある――事の起こりはそのお客さんが重吉を見て「これ、重坊や」と声をかけたところ「重坊ぢゃねえ！」と言ってそのお客の貴重な煙草入れ（象牙？）を取り上げてしまった」というのである。(重吉はものごころついて以来「重坊」とよばれたことはなかった。「重吉!!」「重ちゃん」この二つ以外は自分の呼び名とは思えなかった一否、重坊では大間違いだと言いたかったのであろう）

この一幕について、母は問はず語りに私にその後も話したことがある。母はこの時二十五、六才か、大切なお客は前記の母つたの実母の兄、加藤忠太郎か、或は祖父、政右エ門の兄（榎木戸）であったのでしょう。

八、二つの文学碑

私は次のような「一日の旅」を思う時がある。橋本駅又は相原駅に下車、徒歩、昔のあの二本松の所を経て原宿を過ぎ川尻校を訪ねる。久保沢、谷ヶ原を通り都井沢の加藤家にご挨拶。龍篭山に登り、武雄文学碑を見学する。峯伝いに進み、川尻校の昔の樹栽地の所に至る。「雨降らし」地区から大戸にはいる。そして生家に立ち寄る。このようなコースです。

武雄と重吉―二人の年齢の差は十一、二才でしょう。二人は今日ともに文学碑を遺している。建てられている二つの場所の間には小さな山々があるが直線にすれば二　位です。二人は今も､」そしていつまでも、文学を、詩を、そして人生について、語りあっているのではないだろうか。　　　昭和五十一年十月二十六日

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

緑に囲まれた八木重吉生家

２０１７年茶の花忌で

★　あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募中

皆さんの、愛する重吉に対する思いを原稿にしてください。**今回第４集をお届けします。**さらに第５集に向けて作成を目指しています。どうぞ奮って原稿をお寄せ下さい。

（募集）　題：「八木重吉との出会いとその詩の魅力」（この内容に沿うなら別のタイトルでも OK です。）
字数：２０００字程度（原稿用紙５枚程度、パソコンのワード歓迎）
締切：なし（随時お送りください）
送り先：メール（ kmat27aiko@gmail.com へ）か
郵送で　〒270-1406　千葉県 白井市 中２０５ 小林正継　へ

★八木重吉の詩を愛好する会ホームページ案内

ホームページアドレス　http://www.yagijuaiko.com/　（作成途中の部分があることをご了解下さい）
Ｅメールアドレス　kmat27aiko@gmail.com　（管理者小林正継）